

黒田 絵美子 教授

**演劇とは。脚本であり
俳優であり、演出であり。
何より観客であり
さらにまちづくりである。**

人間の弱さも情けなさも、光も闇もいろいろとりまぜ、笑いのなかで観客を楽しませる舞台。
その脚本の翻訳から落語の新作まで演劇の世界の裏方として活躍しているのが黒田先生だ。
劇場に寄席にと学生を連れて行き演劇環境の楽しみ方をさまざまに体験させる。
英語の戯曲を読みたい人、お芝居に憧れる人、自ら創作に挑戦したい人にも、演劇の魅力が満載の授業。

**初めて手がけた翻訳は
スリラーコメディ。
笑いって、奥が深い。**

大学の先生という立場と、芝居の脚本の翻訳家、そして新作落語の作家といういくつもの肩書きをおもちの黒田先生。

共通しているのは、自分が興味をもつ世界を「演じる」ことによって表現するフィールド。

そもそも演劇自体は、シエクスピアを別として、学問の世界ではあまりメジャーには扱われてこなかったとか…。とくにブロードウェイの

ような商業演劇は、単なるエンターテイメントと思われがちなのだ。

しかし、そのアメリカ演劇を専門に研究、上演台本の翻訳を手がけて日本に紹介してきたのが黒田先生。その作品はたくさんの観客に笑いと涙を届けてきた。

大学では『欲望という名の電車』のテネシー・ウィリアムズや『セールスマンの死』のアーサー・ミラーなど、家族や人間の心の屈折を描いた作家が好きだった。いずれも文学を越えて、映画やお芝居として世界中にファンを増やしていった物語の世界。

そして大学院時代にはじめて上演台本の翻訳を担当し、中でも賀原夏子さん、北林谷菜さんといったベテランの俳優陣による『毒薬と老嬢』は、出演者が入れ替わりながら各地で再演を重ねてきたヒット作となった。黒田先生は大学のお仕事のかたわら、このお芝居を上演した劇団NLTの文芸演出部に所属して、翻訳や演出を年に数本のペースで続けておられる。

これを皮切りに翻訳家・黒田絵美子の名は多くのコメディ作品公演に登場する。

女優の黒柳徹子さんがライフワー

クとしている海外コメディシリーズでは、代表的ないくつかの作品を翻訳。なかでも、『口から耳へ、耳から口へ』（ニール・サイモン作）は、「10秒に一回、観客がおなかを抱えて笑う」という、ドタバタ喜劇である。また、同じく黒柳徹子さん主演によるストリートプレイ、『マスタートークラス』（テレンス・マクナリー作）は、毎日芸術賞、読売演劇大賞を受賞して話題となった。

「若いときは私もコメディって軽いような気がしていたのですが、笑いって奥が深い。こういう時代だからこそ、笑えることってとても大事



黒田 絵美子（くろだ えみこ）

東京女子大学文理学部英米文学科卒業。青山学院大学大学院文学研究科英米文学専攻博士後期課程退学。中央大学商学部専任講師・総合政策学部専任講師・助教授を経て、2005年中央大学総合政策学部教授。研究テーマは、英米演劇を通して見る社会と人間。日本の落語を中心に「語り」というスタイルの劇作の研究。「毒薬と老嬢」「マスタークラス」など、翻訳作品多数。

だと思えます」

またそうした演劇の翻訳という仕事は、文学の翻訳のイメージとはまったく違うもの。

「本だったら文字から理解してもらえますが、お芝居はそのとき一回しか見ない、しかも耳からです。お客

さんも時代背景などをわかっているわけではないから、台本は耳からはいるだけでもわかるような日本語を心がけています。また稽古にはできるだけ立ち会って、現場の動きとあわせて、言葉が多すぎるとか少ないとぎるとか、相談しながらいろいろ変

えていく。読み方によって訳した意図とニュアンスが違ってしまいうこともあります。俳優や演出家の人たちと一緒に舞台を作っていく。それが楽しい」

落語の世界も

セリフだけで描かれる。それはお芝居と同じ。

そうしたなかでより自分らしい世界を描こうと、黒田先生はオリジナルの台本にも挑戦してきた。

最初の作品は、自己啓発セミナーをテーマにした『白いカラス』。(銀座みゆき館劇場で1998年上演)「ちょうどオウム事件があつて、どうして人はそういうことに引き込まれていくのか、をコメディにした作品です。サギとかギャンブルはもちろん悪いことなのだけど、道德だけでわかつていてもラチがあかない。とくに人をひきこむ演説能力というものは、ある種のエネルギーだと考えて書いてみたかった」

芝居の中身だけではなくて、スタッフ全員にロゴマークのついたピンのジャンパーを着せ、自己啓発セミナーらしくチケットにも参加費と印刷、全体の雰囲気もそれっぽくした。

「面白がつてそこから参加してくれるお客さんも多かったのですが、なかには怒って帰っちゃう人もいて(笑)。それがまた興味深かったですね」

舞台をつくる側でありつつ、やはりそこには冷静な研究者の顔ものぞく。

その出演者の1人に柳家さん喬さんという落語家がいる、そのご縁はやがて黒田先生を新作落語の書下ろ



TBS主催の落語研究会のパンフレット。黒田先生の作品「干しガキ」が演目に載っている。

し、という未知の世界へ。

「落語の素養なんてまったくなくて、最初はつきり描写が多いと思つて書いてたら全然ため。全部セリフで書いてと言われて、それでやっと芝居と同じなのだとかかりました。私の新作は現代ものではなく、舞台が長屋で、主人公はたいがい働いてなくて、家でごろごろしている人（笑）」

学生を連れて寄席に。 演劇環境の大切さも 実感して欲しい。

これまでに書いた新作落語台本はすでに12本。2008年、TBS主催の伝統のある落語研究会で、柳家さん喬師匠がトリで演じた黒田作品は、乾物屋で売っている干し猫に干し犬、少々難ありの与太郎ガキを水に戻すと…というちよつとシニールで味わい深いコメディ。50分もの長さの語りもさることながら、現代の作家の新作落語がここで演じられた



英語はやっぱり大変。わからないところは個別指導も。



黒田先生が手がけた翻訳作品の一部。賀原夏子さんから主演『毒薬と老嬢』。黒柳徹子さん主演『マレーネ』

のは、画期的なことだという。

さて、こんな黒田先生の授業だから、もちろんテーマは演劇。そしてその基礎となるのは英語である。

「アメリカで書かれた戯曲は、テネシー・ウィリアムズもアーサー・ミラーもいまや名作になっています。英語もきちつとしていますし、しかもセリフですから、英語教育のひとつとしてテキストを読み、芝居の構造を研究します」

しかし、実際の舞台を見ないことには、やっぱり芝居の勉強したことにはならない。というわけで、

「うちの大学は都心から遠いですし、チケット代も高い。ただ自分が関わった芝居はゲネプロ（舞台稽古）が無料で見られるので、それには出来るだけ学生を連れて行きます」

また、先生がオススメなのは落語の寄席だ。新宿の末広亭なら授業が終わってからも行けるし、学生なら料金は2千円くらい。中入り後だとさらに安い。学生のほとんどはもちろん寄席に行くのは初めてである。「演劇環境の勉強にもなる。とくに



黒田先生が手がけた翻訳作品の数々。

末広亭は棧敷席があるので、靴を脱いで下駄箱に入れてお弁当を食べながら見るといい、明治の人もやっていたのであろう楽しみを味わえます。でも、そうやって五感を全部楽しませることが大事ななのよと言ったら、着いた途端にお弁当をバリバリと（苦笑）。まわりには気がつかうのだという、学生にはそこから教えなければならぬのだと気がつきました」

そして黒田ゼミには、芝居の好きな学生が集まってくる。戯曲のなかには映画になっている作品も多いので、その映画と舞台の台本との比較を行う。場所が限定さ



卒業論文の相談をする黒田ゼミの学生。

れるからこそ、語られることによつて想像が広がる舞台。その特徴を学生も実感していくのだ。「落語は全部が語りだから、すべてを観客のイメージにゆだねる相当高度な演劇なんです。そういう意味では共通する部分があります。そうす

ると、芝居は脚本だけが大事なのではなくて、演出、表現方法も、そして見る側の観客がいないと成立しないということもわかってくる。雨の日の客足がまばらなときと、満員で鈴なりになっているときでは舞台は全然ちがいますから」

さらに黒田先生によれば、さらに大事なものは劇場の外の環境。

「ニューヨークのブロードウェイは劇場が並んでいて、終わって出ると、ほかの芝居のネオンサインが目に入る。あの文化はすごい。次はどれを見ようかと思う。日本ではどことは言えないけれど（笑）、劇場が立派でも外に出たときの雰囲気が悪ければ、折角の感動も台無し。だから、演劇はまちづくりにもつながっていることがわかります」

観客は暗い中に2時間3時間閉じ込められるわけだから、待ち合わせのロビー

の快適さや飲食ができる場所があることも、演劇を楽しむという文化にとつては大切な要素だ。日本の誇るべき伝統的演劇として、歌舞伎や能、狂言があるが、普通の演劇に比べて敷居が高い印象があり、学生たちはなかなか観る機会がないのが現状だ。でも、黒田先生の引率で能楽教室に行った学生は、能の描き出す世界の奥深さに感動し、「人生観が変わった」とまで言ったとか。

わからないことはすぐにネットで調べられる現代に、難解な古語で上演される古典芸能を理解するのは億劫に思われるかもしれないが、「そこには時代を超えて感性に訴えかける人間ドラマがあることを知ってほしい」と先生は言う。そんな黒田先生の情熱が、ゼミの学生たちにも確実に伝わっていく。

高校生の皆さんへ

最近のテレビではお笑いがコンテンツになっていきます。みなさんも見ているかもしれない。ただ笑いを楽

しむのではなくて、ランク付けしている。あれはじつは古代ギリシャの時代からあったものです。人間のなかに、面白いことを言って人と比べようとか、感動のさせ方を比べようという競争が紀元前からあったのですね。

笑いつているのは何だろう、と哲学者も研究していますが、ここまでみなさんがエネルギーを注ぐ笑いと、私はいはそれを人のエネルギーのひとつだと考えています。

そして大学ではレポートを書くとか、プレゼンをするとか、学生に表現させる授業や機会が多いです。成績評価のためだけではないけれど、自分の中にどんな良い考えをもっているか、外に伝わらないのでは意味がない。ブログなど新しいメディアもありますし、お芝居や落語を見て何かを感じたら、自分を表現することを意識的にやって欲しいと思つて、期待しています。